



誘惑の里

僕と美乳天女たち

北條拓人

挿絵 / 木静謙二

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

序章	迷い込んだ天女の里……………	4
第一章	メイドさんの朱唇 わたくしは介抱してさしあげています……………	10
第二章	ナースの桃乳 おねがいですから、わたくしにお情けを……………	60
第三章	巫女さんの乳淫 私にも、おもてなしさせてください……………	115
第四章	処女の誘惑 今夜、夜這いに来てください……………	161
第五章	熟姫の艶乳 私を素直にさせて……………	217
終章	天女たちの美乳 私たちは三人で二人。公平に愛してね……………	269

登場人物

Characters

蓮杖 深佳

(れんじょう みか)

若くして村長を務める美女で周囲から「姫さま」と呼ばれている。理知的で凛とした女性で、村をまとめるしっかりもの。村の女医も務めており、怪我をした俊輔を治療する。

御神 寧々

(みかみ ねね)

村の神社の巫女。上品でおっとりとした性格ながら、時に大胆な行動を取ったりすることも。遭難していた俊輔の第一発見者。

足立 千夏

(あだち ちなつ)

蓮杖家のメイド兼ナース。明るくあっけらかんとした奔放な女性。世話焼きで骨折して動けない俊輔を献身的に看病する。

木部 俊輔

(きべ しゅんすけ)

大学生。冬休みを利用して旅行中、事故を起こして怪我をしてしまう。

「でも、どうしようか。これ……」

恥ずかしげに指をさす、その仕草がかわいい。年上の女性の矜持も、知的な女性が無意識のうちに放つ特有のオーラバリアも、すっかり霧散していた。

「えっ、ああ、放っておいてください。そのうち収まりますから」

妙な話だが、俊輔はまたしても深佳との距離感が縮まった気がした。歳の差さえもが、なくなったように感じられる。

「あの。私に任せてくれる？」

「え、任せるって何をです？」

「だから、これを……。もう。鈍感！ このままじゃ、おしっこできないじゃない」

再び深佳が勃起を指さした。かと思うと、しびんから亀頭が抜かれ、肉胴部分にしなやかな指が絡みついた。

「こんなにさせてしまったのは私よね。不用意に刺激してしまったから……。だから、責任を取るわ」

「せ、責任って……。うあああああ！」

陰茎に絡みついていた手指が、ふんわりと亀頭部分を包み込んだ。親指の先でカリ首部分を甘く擦られるのだ。それに伴い、やるせないような微電流が背筋に通るっぱ

なしとなった。

「み、深佳さん。それダメっ……僕、気持ちよくなっちゃいます」

「うふふ、気持ちよくなっちゃうようにしているの。ほら、我慢しないで……。忘れちゃった？ この村では、お客様を丁寧におもてなしするのがしきたりなのよ。だからこれは私の特別な、お・も・て・な・し」

おもてなしの一言ごとに、きゅつと握りしめられる快感。深佳の手指は、ほんのり湿っているような、それでいてすべすべしている。こういう手を甘手と呼ぶのだろう。そのクリームチーズのようなしっとり滑らかな感じが、勃起皮膚にやさしく浸透してくるように感じられた。

「あああ、深佳さあん……」

「こんなにビクンビクンさせちゃって。相当感じているみたいね」

親指が、なおもカリ首を擦ってくる。同時に、人差し指と中指が繊細に蠢き、鈴口
うごめ
のあたりや裏筋を刺激された。

「ううっ、深佳さん……僕、ぼくう……」

「どうしたの俊輔くん。気持ちいいの？」

深佳の豊麗な女体がしなやかにベッドの上に乗ったかと思うと、俊輔の側面にまと

わりつくように寄り添った。

亀頭部を撫でさすっていた手指は、肉胴部へと移動し、やわらかく握りしめてくる。五本の指それぞれに込められる力が、微妙に違っているため、触手に搦め捕らわれているような感覚だった。

「おうおうっ……深佳さんの手、気持ちよすぎです！」

肉感的な女体が肩や腕、胸元にまでしなだれかかり、その質感ややわらかさまで味わわせてくれる。弾けんばかりの千夏の肉体とはまた違った大人の魅力的魅力。完熟に追熟まで重ね、おんな盛りをあられもなく咲き誇らせた女体は、やわらかく寄り添わせただけで、しかも洋服を纏ったままだと言うのに、容易く俊輔を悩殺した。

「深佳さんのおっぱい、凄いのですね……。二人の間にクッションが挟まっているみたい……ふつかふかかでやわらかで……」

肉塊からの抗いがたい悦楽に見舞われながら、深佳の乳房のポリウムや感触が、天女のものに近いことに思い当たった。

「深佳さんなんです。やはり、深佳さんが、裸で僕を温めてくれたのでしょうか？」

うっとりとし勃起をしごかれながらも、そう問いかけずにはいられた。けれど、深佳はそれに答えてくれず、逆に問いかけが返ってきた。

「どうしてそんなに俊輔くんは、それにこだわるの？」

「命の恩人にお礼を言いたいし、おぼろげに垣間見た、あの人に惹かれるのです……」

「まあ、私におちんちんを握らせておいて……。うふふつ、でも君はいい人だね」

ふいに深佳の美貌が、俊輔の顔の至近距離にまで近づいた。マッシブな女体が真正面に対峙して、胸板にぶにゅんと乳房が押し付けられた。

花びらのようなどぎまぎするほど美しい唇が、俊輔の同じ器官にゆっくりと重ねられる。思わずビクンと身体を震わせると、ぼつてりとした唇の感触を味わわせようとするかのように、やわらかく押し付けてくる。

「み、深佳……さ……ん」

体を強張らせる俊輔に、嫣然えんぜんとした微笑が投げかけられた。

「キスくらい、初めてではないでしょう？」

ブンブンと縦に振られた顔に、衣擦れの音が、もう一度近づいた。

「あの、深佳……さん？」

「もう、唐菱木とうへんぼく……いいから、じつとしてるっ」

半ば呆然としている俊輔の上唇が、上下の朱唇に挟まれ、優しく引つ張られる。ぶるつと揺れたのを薄い舌でくすぐられ、今度は下唇が挟み取られた。

「むふん、ちゅちゅつ……どうかしら？ 私の唇……むちゅちゅつ、はふん……」

「甘いです……ぷちゅちゅつ……それにぼてぼてとたまらないやわらかさで、温かいし……ぷちゅちゅちゅつ……」

濡れたような瞳がニコリとすると、俊輔の顎にチュツと唇があてられた。しかもその間、一刻たりとも手指は肉茎を離れようとしなない。やさしい握りしめに刺激され、背筋をびりびりと悦楽が走り続けていた。

「うふふ。俊輔くんの唇、奪っちゃった」

固まったまま動けずにいる俊輔に、茶目つ気たつぷりの笑みが振りまかれる。

「ねえ、今度は、唇を開いてみて……」

促されるままに開かれた唇の間に、朱舌が挿し込まれた。

口腔の中で、舌と舌が出合い、互いを擦り付けるように絡めあう。

「ぶちゅるる、くちゅちゅつ……むふん、はふう……俊輔くんの……お口の中……熱うい……じゅちゅちゅ、ぴちゅちゅるる……」

一度離れて、息継ぎをしてから、また唇を重ね合わせる。今度は、俊輔が深佳の口腔に侵入を果たした。俊輔の唾液が口の中に溜まったのを、躊躇いなく深佳は嚙下してくれる。千夏の唾液をお薬と称して飲んでいる俊輔は、その行為が相手によほどの



好意を抱いていなければできないことを承知している。それだけに、深佳が呑み込んでくれたことがうれしかった。

「あぐううっ、深佳さん……僕、もう……」

熱い口づけに深佳の心も蕩けてきたのか、勃起への手淫はさらに熱心さを増していた。細い手首のスナップを利かせて、グチョッグチョッという汁音を奏でるのだ。

「あっおううっ……」

射精前のジリジリするような焦燥感に俊輔は、左手で深佳の胸元にしがみつき、右手で細肩をつかまえた。

「やばいですっ！ 深佳さんの手、気持ちよすぎてっ……」

「うふふっ、俊輔くん、本当に気持ちよさそう……。なんだか私、どんどんエッチな気分になってきた。どうしようかな、特別にもう少しサービスしちゃおうか……」

細く長い手指にまわりついた俊輔の先走り汁で、悪戯っぽく銀の糸を引かせて見せる深佳。女体が緩やかな性感に浸されているのだろう、下の方から俊輔を見上げる瞳は、しとどに濡れていた。

「ああ、深佳さん。僕を気持ちよくさせてください！」

嫌われたくない一心で、あれほど気を遣っていた俊輔が、嘘のように素直な気持ち

を露わにした。いかにもそれがうれしいと深佳の表情が、妖しく蕩けた。

「ああん、ずるいぞ俊輔くん。そんなに素直になつて……。してあげたくなくなっちゃうじゃない」

豊饒な肉体がしなやかにカーブを描き、美貌が俊輔の下腹部に向けられた。

「あうおつつつ……み、深佳……さ……んっ」

脈動する肉竿に、形の良い朱唇をあてがわれたのだ。

薄い舌がチロリと伸ばされ、龟头を舐めては顔を離し、ふぁざりと落ちてきた黒髪を掻き上げる。朱唇があんぐりと開かれると、ついには龟头部が口腔に呑み込まれた。千夏がかいがいしくタオルで拭ってくれるとは言え、しばらくお風呂にも入っていない。男根は我慢汁でべとべとな上に、カリの周囲や裏筋に様々な分泌物が付着しているはずだ。にもかかわらず、深佳は厭な顔一つしないどころか、いかにも愛おしいと言った風情で勃起を啜えてくれるのだ。

「うああつ、ぐあああああッ!!」

口腔の温もりと、ぬるりとした粘膜の快感に、俊輔は歓喜の声をあげた。

「ほふうっ……ふむん……ひゅん輔くんのおひんひん……ちよつと苦ふて、しゅっぱひ……はむうん」

深佳は大きく一度息を継ぎ、唇をすぼめるようにして肉腹を締めつけてくる。さらには、尖らせた舌先で鈴口を抉られた。

「ぐううっ、み、か……さん」

あまりの快感に俊輔はうなり声をあげながら、ぎゅぎゅつと菊座を絞った。熱い血液を肉塊に注ぎ込み、傘を一段と膨らませたのだ。その肉の柱に沿うように、深佳がゆっくりとしたストロークをはじめた。

「大ひいのね……じゅちゅつ……顎が外れてひまいほう……んっ……んむうっ……」

長大な肉棒を喉奥まで呑み込むと、深佳は苦しそうに眉根を寄せ、美貌を淫らに歪ませた。目尻に涙を浮かべ、荒い鼻息を病室に響かせている。艶やかな髪が、美貌を上下させるたび、俊輔の太ももをくすぐっていく。

じゅぶちゅちゅるる、ずちゅぶ、ぶちゅぶ、じゅじゅぶちゅぶ——。

豊潤な唾液をたっぷりと勃起にまとわりつけて、口奉仕する深佳。ぼってりした唇の端からは、零れ落ちた唾液を濃艶に滴らせている。

「ふおおぐうう、深佳さん、やばいです！　がぐうう、凄すぎる!!」

医師としての義務感だけでは、絶対にできないはずの口淫を、ありったけの愛情を込めて施してくれている。しかも、深佳自身も欲情しているのだろう、しきりにお尻

のあたりを蠢かして、太もも同士を擦りつけていた。

(凄いよ、本当に凄すぎるよ……あの深佳さんが、唾えてくれるなんて……)

じっとしていられなくなった俊輔は、不自由ながらも腰を浮かせ、あわただしく動かしはじめた。

「おうん……俊輔くん……激しいのね……にちゆる、ずぶちゅちゅ……もう……射精でちゃいそうなのね」

抽送のピッチが上がり、えずきそうになっても、深佳は肉塊を吐き出そうとはしない。かいたいしくも俊輔の白濁を、口で受け止めてくれるつもりなのだ。

口腔性感を突かれ発情を促されるのか、豊麗な肉体を淫らにくねらせている。白魚のような右手を、今にも自らの淫裂に導くのではと思われるほどの身悶えだった。

「深佳さんごめんなさい。僕、もう我慢できません」

情けなくも限界を告げた俊輔に、まさしく天女のごとき慈愛たつぷりの、それでいて嫣然とした微笑みが向けられた。

「いいのよ。すつきりしていいの。そのためにこうして口でしてあげているのだから。私が飲んであげるわ……」

ゾクゾクするほど色っぽい上目遣いで、放出を了承する深佳。またすぐに、勃起に

舞い戻った朱唇は、口腔粘膜全体でぬるぬると締めつけてくる。添えられた右手で茎を丹念に摩擦し、左手には睾丸を優しく揉みほぐされた。

「うううっ！ も、もう射精ちやいます!!」

熱い衝動が背筋を駆けのぼる。頭の中に閃光が走り、牡のシンボルが溶解していくのを感じた。腹筋にグイッと力を入れてトリガーを引き絞る。ぐぐぐつと肛門を閉じ、太ももやふくらはぎも痙攣せんばかりに緊張させた。

獣のような咆哮を、喉元から迸らせようとしたその時だった。

「ただいま帰りました……。俊輔さん、いい子にしてみましたか？」

突然、病室のドアが開かれ、千夏が入ってきた。

「うわああっ！」

驚きの声をあげながらも、俊輔は危ういところで射精を免れた。我慢できたと言うよりも、びっくりして引っ込んだと言った方が正しいかもしれない。

「ほら、用意できたわよ。我慢しないで、早くおしっこしなさい」

いつの間にか深佳は俊輔の肉塊にしびんをあてがい、何食わぬ顔を取り繕っている。
(うわあ、深佳さん、やっぱり大人だあ……)

あれほど漂わせていた濃艶さは、知的オーラによってすっかり掻き消されていた。

「なっちゃん。お帰り。早かったのね……。じゃあ、ここ代わってくれる？ 俊輔くん、おしっこ我慢していたみたいよ」

完璧な深佳の演技に、俊輔は半ばあつけにとられながらも、その横顔がわずかに紅潮していることに気づき、どこかほっとした。

3.

「まあ、本当に溜まっていたのですね。こんなにいっぱい……」

しびんを斜めに掲げながら、聞き様によつては誤解を受けるような台詞を吐く千夏。いつもながら美人としびんの取り合わせは、似つかわしいと思えない。

突然の千夏の登場に、射精衝動はおろか勃起までが収まり、お陰で放尿はスムーズに済ませることができた。

「ちよつとこれ、流してきますね」

千夏の背中を見送りながら、いつもの様子と変わらないことにホッとした。

「ふう。千夏さんにばれずに済んだみたい。ひとまずは、よかった……。のかなあ？」

深佳に恋心を抱きながら、千夏にも惹かれている自分の優柔不断さが、その独り言に現れていると気づき、思わず苦笑した。

「えっ？」

繊細な鎖骨を艶やかに輝かせ、その直下から丸く張り出した乳房も、ピンクに色づかせている。羞恥に染まって紅潮した美貌が、全裸ヌードのセクシーさをさらに強めていた。

「ね、寧々さん？」

「私どうですか？ 二十五にもなつて処女だなんて恥ずかしいけど、おんなとして魅力あるでしょうか……？」

押し付けられたままの乳房が作る深い谷間が、俊輔を甘く誘った。

「ここ、こんなに堅くしてるのって、私に反応してくれているのですよね？」

しなやかな手指が、甘やかに勃起に巻きつき、むぎゅつと竿幹を握られた。

「あううううっ」

おずおずしたぎこちない指使いが、あまりに初々しくかえつて男心をそそられる。ただでさえ張りつめていた肉竿は、どくんどくと脈打ち、雄々しくそそり立った。

潤滑油不足で動きが制約されるのを、どこでそんなことを覚えたのか、寧々はボデーソープを手指にまぶしはじめた。ねっとりしたソープ液をまんべんなく塗りつけようとする手指が、ぐちゅぐちゅつと勃起肌を滑る。その何とも言えぬ快感に、思わず

俊輔は尻穴をヒクつかせた。

「すごおい、まだ大きくなれるのですね。ああ、それに殿方ってこんなに熱い……」
肉塊の灼熱に触発されて女体が火照るのか、寧々の額にはうっすらと汗が滲んでいる。そればかりではなく、薄紅に染まった肉体にも汗汁が滴りはじめていた。

紅潮した女体がしっぽりと濡れていく姿に、俊輔は鼻血が出そうなほど興奮した。
「ね、寧々さん、そんなことされたら僕、また頭に血が上って、正気を失くしてしまいますよ」

「そうですね、こんなこといけないことですよね。でも、私も俊輔さんをおもてなししてあげたいのです。こんなこと初めてで、下手くそかもしれないけれど、こんな私に反応してくれているのですもの……」

我慢汁とボディソープでぐちよぐちよになった亀頭部分を、軽く握りしめられたり、親指や人差し指が繊細な指使いできゅきゅとと表面を擦ったりする。

「ずぎゅんと背筋に快感電流が駆け抜け、びくんとお腹の筋肉を収縮させる。」

「本当に堅くって、熱いです……。それに幹に浮き出た血管がドクンドクンって……」
アーモンド形の大きな瞳には、淫らな好奇心がありありと浮かんでいる。キラキラと妖しく煌めくのは、緩やかな発情に潤ませているからだ。昂奮に喉が渇くのか、し

きりに朱唇を舌で湿している。こうして見ると、寧々の唇は肉花びらのようで、あえかに開いて艶治に微笑むと、口元のほくろとの相乗効果で、途方もなく官能的だった。「ぐっ、ぐぐぐっ、ね、寧々さんんんっ」

泡汁のヌルつきを纏った小さな掌に、赤紫の傘から太い幹を經由して根元まで、ゆつくりとしごかれる。誰に教わるでもなく、おんなの本能だけで、余った皮を亀頭に被せるようにして、ずるんずるんと上下させてくる。

「ごめんなさい。私、処女なのに、こんなに淫らで。神に仕える巫女なのに……」

屹立を緩やかにしごかれ、込み上げる射精感を、体を硬直させて必死にこらえた。

「あっ、あっ、あっ、寧々さん」

青筋を立てた牡莖は、次々と鈴口から我慢汁を拭き零し、聖なる巫女の手指をべとべとに穢した。それがひどくいけないことのように、背徳感をいたく刺激してくれる。寧々の手淫の心地よさは、もはやこの世のものとは思えないほどのものだった。恋い焦がれた天女から奉仕を受けているのだとの思いが、童貞の少年のように気持ち昂らせ、性感をより敏感にさせているのかもしれない。もちろん彼女の手つきには、技量、手管、経験の全てが欠けている。にもかかわらず、この気持ちよさはどうだろう。恐ろしいほどの興奮と、やるせないような悦楽が、下半身を蕩かしていく。あっ

けなく放出してしまいそうなほどだった。

「う、うううむ……ぐううつ」

しごかれるたび、俊輔は獣のように呻き、動きに合わせて腰を前後させていた。

「ううつ、き、気持ちいいつ。すつごく気持ちいいです」

「寧々がしているのですね。俊輔さんを気持ちよくしてあげているのですね。あん、感じて……もつと感じてください」

もはや発情しきった彼女に、禁忌を思う余地もないのだろう。バスチェアに腰掛けたままの俊輔の股間に、赤い顔をした寧々が女体をぐぐつと沈ませた。

5.

瑞々しい乳肌が、俊輔の胸板やお腹の上をツツツと滑っていく。泡立てた生クリームのような肉房が、くすぐつたいような心地よいような何とも言えない感覚を味わわせてくれる。

それも生娘さむすめの寧々の行いだから意図したものではなく、健気さが天然にさせているのだ。初々しいまでの懸命さが、俊輔の彼女への愛しさを増幅させた。

「気持ちいい。寧々さんの肌が、僕に触れるだけで、最高に気持ちいいです！」

「うれしい。俊輔さんに悦んでもらえるのが、とつてもうれしいです……」

低い姿勢のまま寧々は、自らの胸元にもボディソープをまぶすと、俊輔の股間に谷間を運び、躊躇うことなく男根を挟んだ。小柄な肉体は、相当に柔軟で、ぐぐつと身体を折り曲げていても、まるで苦にしない様子だった。

「ああ、私、淫らなことをしているのですね……。ああ、でも……」

いかにも切なげな表情で、見上げてくる瞳は淫情に潤んでいる。

ソープにぬめる皮膚と人肌の温もり、ドクンドクンと早鐘のように打つ鼓動までもが、肉茎を通して伝わってきた。

「近親婚を遠ざけていても、どうしても血は濃くなります。だから、村のおんなたちは淫らなのかもしれません。子をなす本能にも縛られていますから……」

熱に浮かされたような言い訳と共に、初々しくも熱心なマッサージがはじまった。

たつぷりとした乳房の外側を両手でむにゆりと押しつぶし、肉塊を圧迫してくる。二度三度と繰り返された後、裸身全体を揺すらせて、もちもちの乳肌を幹に擦りつけてくる。ぐちゅんぐちゅんと寧々が擦ると、白い泡がもこもここと沸き立ち、それはあたかも俊輔の性感が具現化するかのようだった。

「ごうかしら……これで、気持ちいいですか？」



しきりに確認を取りながら乳淫を施してくれる寧々。うっとりとして眼をつぶると、そのシルキーな声質がさらに天女のものだとダブっていく。

「あつ、ああんっ！ 私もおっぱい感じちやいます」

肉幹にしこりを帯びはじめた乳首を巻きこまれ、悦楽の淫波に打たれたらしい。

初めて耳にした寧々の艶声に、たまらずに俊輔は、自らも腰使いを駆使して乳肌を犯しはじめた。

（天女さまのおっぱいに、おちんちんを擦りつけてる。天女さまのおっぱいを犯してるんだ！）

昂る気持ちに腰の律動も、激しさを増していく。けれど、それがまずかった。ただでさえ安定の悪いバスチェアの上で腰を振ったため、バランスを崩してしまい、ズルリとお尻を滑らせた。

「うああっ！」

「きゃあっ！」

危うく腰を打つところだったが、バスチェアが背中中で留まり、事なきを得た。

俊輔の腰を支えるようにすがりついたまま固まる寧々。驚きに丸くしたアーモンド形の瞳が、こちらをぱちくりと見つめている。

「あ、危なかったあ……」

目と目を合わせ、思わず笑いだした。

「ほんと、危なかったですね。これ、どけちゃいませうね」

お尻を直接タイルに置くと寧々がバスタチェアを押して、あちらの方角に滑らせた。

ハプニングに水を差され、気恥ずかしさに互いに照れ笑いをする。それでも収まらうとしない勃起には、未だにやわらかい手指がまとわりついたままだ。

「でも、寧々さんのおっぱいって、夢中になってしまうほど気持ちいいんですね」
ぼりぼりと頭を掻きながら俊輔は、おどけ顔で話の接ぎ穂を探った。

「俊輔さん、私のおっぱい好きですか？ 大きすぎておかしくありません？」

「おかしくなんてないです。大きくてきれいなおっぱい、僕は大好きです。寧々さんのおっぱいにおちんちんを突き刺したいくらいです」

「うふふ。おっぱいにおちんちんを？ じゃあ、やってみますう？」

言葉が終わらないうちに寧々の左手が、俊輔の胸をやさしく押し倒した。その場に仰向けになれと言うのだ。さらには、右手で自らの肉房を掴み取り、勃起先端に近づけてくるのだった。

「うおっ、そんな……寧々さん、う、嘘でしょう？ そんな……」

勃起の至近距離にあった白くて大きな塊が、亀頭部分にたぷんと覆いかぶさる。

「うがっ」

「ふうんっ」

乳丘頂点で頭をもたげる陥没乳首が、俊輔の鈴口に突き刺さり、ほとんど同時に、二人は快感の呻きをあげた。

「んんっ。ああ、ふう……私のおっぱいに、俊輔さんが突き刺さりますっ」

快感に苛まれながらも、自分の乳房をますます勃起に押し付けてくる寧々。甘勃起状態だった乳首が淫波に反応し、さらに堅さを増して、俊輔の小便孔をこじ開けんほどの勢いで、いっそう深く食い込んでくる。尿道内粘膜をこれほど刺激されるのは、さすがに俊輔も初めてだった。

「あはあっ！ ね、寧々さん、うああ、ねねえっ!!」

絶叫が浴場でこだました。今すぐにでも撒き散らしそうになって、辛くてたまらない。腎朶がひくつくのもの、射精をこらえて、力いっぱい肛門を引き絞ったせいだ。

「ああ、俊輔さん。とっても気持ちよさそう……」

俊輔の反応がよほどうれいのだろう、美しい肌にも鳥肌が立っている。どこまでも健気な寧々には、感動させられっぱなしだ。

「辛そうなおちんちん、早く宥めてあげたい。だから、もっともっと気持ちよくなっ
てください」

さらなる快感を与えようとしたものか、寧々が乳首を勃起に食い込ませたまま、回
転させるような動きを加えた。擦りつけによる摩擦快感を呼び起こすつもりらしい。

「あん、はふう、俊輔さんのおちんちんで、私も気持ちよくなっちゃいますうっ」
いかに堅くしこらせるとは言え、しよせん乳首は皮膚粘膜に過ぎない。しかも、神
経が無数に通う敏感な箇所だ。亀頭粘膜との擦り合いに、ひどく歪み、ねじれ、大き
な快感に見舞われるようだ。

「ほううっ、あっ、ああん、はうっ、ううん」

鈴口からは我慢汁が、射精でもしたかのように多量に吹き出している。ソープと牡
汁まみれの乳首は、まるでペニスに舐めしゃぶられているかのように、妖しく濡れ光
り、ますます感度を上げている。その証拠に、白い背筋が、淫らなうねりを見せはじ
めていた。悦楽の淫波に、じっとしていられないのだろう。

「ああ、寧々の乳首、ねとねとになって、すっごくいやらしくなったね」

「ああん、だつて、俊輔さんのおちんちんに、舐められて……あふうっ！ すっかり、
大きく……ふあうっ……私の乳首、こんなになったの初めてですう」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!